

行書変遷の契機としてみた長沙東牌樓後漢簡牘の考察

著者	松木 利香
発行年	2013-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10105/9824

目 次

はじめに	1
第1章 行書	2
1. 書論の行書	3-4
2. 出土簡牘における最初の行書	5
3. 東牌樓後漢簡牘以前の簡牘の行書	6-8
第2章 長沙東牌樓後漢簡牘	9
1. 東牌樓後漢簡牘の出土内容	9-10
2. 東牌樓後漢簡牘の行書	10-32
3. 東牌樓後漢簡牘の行書の分析	32
(1) 点画・用筆	33-37
(2) 結構	37-38
(3) 簡略化	38-43
(4) 章法	43-44
第3章 繙承される行書	45
1. 鍾繇の行書	45-46
2. 張芝と同時代の行書	47-49
おわりに	50-51
参考文献	52

はじめに

私たちが日常に使用している行書は、草書に比べて厳格な書体、楷書に対してくだけた書体というきわめて曖昧な存在にも見える。しかし書くのには、その自由さから他のどの書体よりも使用される頻度が高い。

行書は東晋の王羲之の頃に完成したのではないかと思われるが、そこにたどり着くまでにいったい行書はいつ生まれ、どのような変遷をたどってきたのであろうか。唐の張懷瓘の『書斷』¹に「行書者、後漢穎川劉德昇所作也（行書なる者は、後漢の穎川の劉德昇の作る所なり）」とあることから、後漢の劉德昇の出た頃と推測されてきた。しかし 20 世紀の初頭に肉筆資料としての最初の簡牘が発見され、その後現在までおびただしい数の出土が続き、書体の歴史は大きく揺らいだ。行書においては、近年に発見された走馬樓三国吳簡（1996 年出土）および東牌樓後漢簡（2004 年出土）に早期の行書の姿を見ることができる。東牌樓後漢簡の出土によって、行書の興りは『書斷』の内容と一致するようにもみえる。しかし出土の詳しい資料や研究発表も増え、更なる新たな出土から行書の起源を後漢と特定することはできない。

東牌樓後漢簡牘は、篆書・隸書・草書・早期の行書・早期の楷書と、それまでの時代にはない五書体揃った初めての簡牘である。隸書が公用書体であった後漢時代に、全ての書体が書かれていることは大変興味深く、特に行書については数多く見られることから、この時代に初めて隸書と行書の書き分けが明確に行われていたのではないだろうかと考える。

本論では東牌樓後漢簡牘を中心とした漢時代の肉筆資料から初期の行書の姿を探り、その進化の過程をたどるとともに簡牘中に書かれた行書と隸書の文字の比較分析を行い、後漢後期における文字の書き分けについて明らかにしたい。また中国書論における行書の諸説から肉筆資料との差異を抽出し、後漢後期の行書の位置づけを探るとともに、後の時代へどのように継承されていったか、深く考察していくこととする。

¹中国書論大系第 3 卷『書斷（上）』張懷瓘著 杉村邦彦訳 二玄社 1978 年出版 P43

第1章 行書

行書は唐の張懷瓘²の「即正書之小偽、務從簡易、相間流行、故謂之行書（正書の小偽、務めて簡易に従い、相間流行す、故に之を行書と謂う）。」のことばに従えば、楷書を少しくずしたもので、なるべく簡易にし文字から文字へながれるように続いて行くので、これを行書というとしている。これは唐代の書論であるから、東晋の王羲之をはじめとした能書家たちによって楷書の構造を基本とした行書の用筆・結構が工夫され、芸術性の高い書体として完成されたと思われる後の時代の言葉である。しかし行書が生まれたとされる漢代は、公用書体としては隸書であり、通用書体であろう草書、草隸あるいは章草と呼ばれるものは全て隸書の特徴である波勢を持ったものが底流しているかたちとなっている。『書道講座 2・行書』³によると「漢代にはまだ行書らしいものはない。漢代は波勢の時代で、当時の流行した隸書、草隸、草書のどれにも波のうねりといった波勢というリズムが大きく流れている。一点一画をいちおう立てて、それをつづけ書きする行書と基本的にちがうので、行書らしいものがないのは当然であろう」とされている。今日の行書は、形としては楷書を少しくずしたものではあるが、変遷上においては隸書から生まれたものである。行書の歴史を振り返るとき、楷書の完成以前と以後では様式が異なるため、筆者はこれらを分けて考えたい。東牌樓後漢簡牘の行書は楷書の完成以前のものであるが、それよりも更に早期の行書あるいは行意を持った隸書はどのようなものであったか。また中国書論における後漢の行書はどのように書かれていたのか、次にみていきたい。

²中国書論大系第3巻『書断(上)』張懷瓘著 杉村邦彦訳 二玄社 1978年出版 P43

³『新装版書道講座②行書』西川寧著 二玄社 1987年出版 P9

1. 書論の行書

行書と言う名は、書論においては西晋の衛恒『四體書勢』⁴にはじめて見られる。「魏初有鍾胡二家為行書法、俱學之於劉德昇、而鍾氏小異。然亦各有巧、今大行於世云（魏初に鍾と胡との二家ありて行書の法を為し、俱に之を劉德昇に学ぶも、而して鍾氏、小や異なる。然れども亦た各おの功あり、今、大いに世に行わると云う。）」とある。劉德昇に学んだ鍾繇(151-230)と胡昭(162-250)の二家が行書の基準を作り、これが世間で流行していたことを示している。劉德昇は、生卒不詳であるが後漢の中期の人で、上記の書論に沿えば行書をはじめた書人となるが、その墨跡は存在せず伝聞である。また唐の張懷瓘の『書斷』⁵には「劉德昇、桓靈之時、以造行書擅名。雖以草創、亦豊研美流婉約、獨步當時（劉德昇、桓・靈帝の時、行書を造るを以て名を 擅 にす。草創を以てすと雖も、亦た研美豊かに風流婉約、当時に独歩す。）」とある。桓帝・靈帝のころ、劉德昇は行書をつくり出した人としてその名をほしいままにし、当時まだつくったばかりであったにもかかわらず、研鑽を積んだ美しさがあり、風雅で奥ゆかしさをもっていたので、当時他に並ぶものがないほど優れていたとされている。更に「胡昭鍾繇竝師其法。世謂鍾繇行狎書是也。而胡書體肥、鍾書體瘦、亦各有君嗣之美（鍾繇・胡昭ならびに其の法を師とす。世にいう鍾繇の行狎書とは是なり。胡の書は体肥え、鍾の書は体瘦するも、亦た各おの君嗣の美あり。）」とあることから、先の『四體書勢』と同じく君嗣（劉德昇の字）の研美を鍾繇と胡昭の二家が受け継いでいたと記されている。

鍾繇と胡昭であるが、鍾繇は六朝時代の宋の羊欣が著した『古來能書人名』⁶にもその名を見ることができる。「鍾書有三體。一曰銘石之書、最妙者也。二曰章程書、傳秘書教小學者也。三曰行狎書、相聞者也。三法皆世人所善（鍾の書に三体有り。一に曰く銘石の書、最も妙なる者なり。二に曰く章程書、秘書に伝え小学校を教うる者なり。三に曰く行狎書、相聞する者なり。三法皆な世人の善しとする所なり。）」とある。鍾繇が得意とした書には三体があり、一つ目の銘石の書は石碑に

⁴中国書論大系第1巻『四體書勢』衛恒著 上田早苗訳 二玄社 1977年出版 P97

⁵中国書論大系第3巻『書斷(上)』張懷瓘著 杉村邦彦訳 二玄社 1978年出版 P128

⁶中国書論大系第1巻『古來能書人名』羊欣著 吉田教專・神谷順治訳 二玄社 1977年出版 P148

書する書体であるが、当時の書体から考えれば隸書で書かれたものと思われる。二つ目の章程書は秘書官に伝えて小学校で教えた書体であるから現在の楷書にあたるであろう。三つ目の行狎書は相聞（書簡）に用いる書体のことをいう。書簡に用いる書体とは、先に述べた『書斷』の続きに「王愔云、晋世以来、工書者多以行書著名。昔鍾元常善行狎書、是也。爾後王羲之獻之、竝造其極（王愔云う。晋世以来、書に工みなる者は、多く行書を以て名を著すと。昔、鐘元常（鍾繇）行狎書を善くす、是なり。その後、王羲之・獻之並びにその極に造る。）」とあり、王愔によると晋以来、書に巧みな者の多くは行書で名声を得ており、昔、鐘元常（鍾繇）が行狎書を得意としていたというのがこれにあたる。その後、王羲之・獻之父子が出てその頂点に達したという。つまりここに出てくる行狎書とは、行書のことをさすことになる。胡昭については「史書（隸書）を善くし、鍾繇と並び称され、また尺牘は書法にかなっているという。」⁷と記されているが、伝えられる書がなく、劉德昇と同じく伝聞の域をこえない。しかし、この3つの書論以外にも梁の庾肩吾の『書品』⁸で「徳昇之妙、鍾胡各採其美（徳昇の妙は鍾・胡各おの其の美を探る）。」とあり、劉徳昇の妙趣は鍾繇と胡昭がそれぞれにそのすぐれたところを取り入れた、という内容からしても劉徳昇が行書を作ったという真偽は別にして、書論においては、劉徳昇に学んだ鍾繇と胡昭が行書の名手であった信憑性は高い。また『四體書勢』で「大いに世に行わる」、『書斷』で「世に言う鍾繇の行狎書」というところから、この時代に行書が相当に流行していたことも窺い知ることができる。

東牌樓後漢簡牘が書かれた時代は後漢後期のものとされているので、書論の上からみれば、劉徳昇が活躍した時代は、東牌樓後漢簡牘より少し早い時期になることが分かる。また鍾繇と胡昭については十代後半から三十代の頃となることから、劉徳昇が行書を作る→東牌樓後漢簡牘に早期の行書が書かれる→鍾繇と胡昭が行書の基準を作る、という変遷を経て今日に至っているということになる。

では現在までの出土による肉筆資料では、行書はどの時代からその姿がみられるのか、20世紀初

⁷中国書論大系第1巻『書人伝』二玄社 1978年出版 P359

⁸中国書論大系第1巻『書品』庾肩吾著 興膳宏訳 二玄社 1977年出版 P251

頭に発見された行書の簡牘・帛書・残紙から近年出土の簡牘までを漢時代の行書に限定して調べてみた。

2.出土簡牘における最初の行書

20世紀初頭、スウェン・ヘディンやオーレル・スタインらの探検家によって中国西域での大規模な発掘調査が行われた。出土した膨大な数の簡牘や帛書・残紙は、石刻あるいは文献でしか知り得なかった中国書道史に大きな衝撃をもたらした。これらは実際に書かれた肉筆資料であり、発見以来数々の研究が進められた。その後も多くの研究者によって新疆ウイグル自治区、甘粛省、内モンゴル自治区の砂漠地帯に点在する廃墟となった遺跡の発掘がなされ、新たな簡牘類が続々と出土した。また1970年以降は、墳墓や古井戸、烽燧（のろし台）跡などからも多数の簡牘類がもたらされ現在に至っている。早期の行書の姿はこれらの簡牘類の出土によって次第に明らかにされてきたが、その多くは隸書の波勢を持ったものであり、現在の行書とは形の異なるものである。

スウェーデンの地理学者スウェン・ヘディンを団長とする西北科学考察団によって1930年から約1年間と1972-74年に内モンゴル自治区額濟納河流域の遺跡が発掘された。いずれも後漢前期頃のもので、その数は合わせて約3万点にも及ぶ。居延漢簡と呼ばれているが、最初に出土した簡牘を居延旧簡、後に出土した簡牘を居延新簡として区別している。居延旧簡の字体は八分・章草・草隸・草書で、行書は存在しないが、居延新簡は篆書・章草・草書があり、章草に分類される簡の中に隸書の波勢を持ちながら書かれた早期的な行書の文字を複数見ることができる。これは、出土順において最初に見られた行書といってよいであろう。

(右図・居延新簡部分)



3. 東牌樓後漢簡牘以前の簡牘の行書

東牌樓後漢簡牘の発見は近年の書道史上、大きな意味を持っている。第一として、行書の成立の時期や変遷の過程を明らかにするための手がかりが提示されている点である。漢代の肉筆資料としては前述のとおり敦煌漢簡・居延漢簡が知られていたが、時代としては漢・魏・晋のいずれかに属するという状態である。しかし東牌樓後漢簡牘は後漢後期であることが明らかである。これは東牌樓後漢簡牘以前の行意のある隸書と敦煌漢簡・居延漢簡の中の行書とも合わせ、漢時代の行書の実態を把握することができる。第二は、行書の用途と後の時代に引き継がれていった必要性を知ることができるということである。敦煌漢簡や居延漢簡が匈奴に対する前線基地から出土した行政文書を中心にするのに対し、東牌樓後漢簡牘は古井戸から出土したもので、行政文書も含まれてはいるものの大半が私信（書簡）あるいは私信を送るための封や箱に書かれた文字である。では東牌樓後漢簡牘以前の簡牘の用途はどのようなものか、文字の特徴とあわせてみていく。また東牌樓後漢簡牘と同じ文字で比較も行った。

これまでに出土した簡牘のうち、東牌樓後漢簡牘の時代以前の行書あるいは行意のある隸書を分析すると、一番時期の早いものとして前漢中期の天長前漢簡、前漢の敦煌馬圈湾漢簡の2つがあることがわかった。また東牌樓後漢簡牘より少し前の時期のものとしては後漢前期の武威旱灘坡後漢簡、後漢中期の張家界古人堤後漢簡の2つがあり、計4つをあげることができる。漢代は石刻においては隸書の波磔の美しさが強調されている時代のため、出土された簡牘にも波磔のあるものが大半である。しかしこの4つの簡牘は波磔が比較的控えめで、外形も縦に少し伸びている。また文字によっては東牌樓後漢簡牘と非常に似た字形のものも存在する。

① 天長前漢簡 安徽省 前漢中期 前117年以降 (部分次頁下図①)

木牘34枚で、内容は公文書で戸口簿（戸籍簿）・私文書（書信）・贈り物目録などである。隸書の特徴である波磔だけを太く強調して書かれているが、省画されている字も複数ある。東牌樓後漢簡牘の字と相当似ているものもある。

② 敦煌馬圈湾漢簡 甘肃省 前漢 前71年～21年（部分下図②）

簡牘1217枚で、詔書・律令・檄などである。縦長の字形が多くなり、へんと旁の高さに変化があるところは後の行書の姿といえる。

③ 武威旱灘坡後漢簡 甘肃省 後漢前期 光武帝43年（部分次頁③）

木簡16枚で、律令に関するものである。右転折が横画で一度止まり下へおり、次画へ続け書きするものがみえる。①、②にはない形である。

④ 張家界古丈人堤後漢簡 湖南省 後漢中期（部分次頁④）

簡牘90枚で、公文書・書信・医方（医学書）・曆日表など多岐にわたる。隸書の横長の字形のものが多いため、波勢は静まり、横画の長さに変化がみえる。また太さに変化があり、はね・はらいは今日の行書のかたちである。

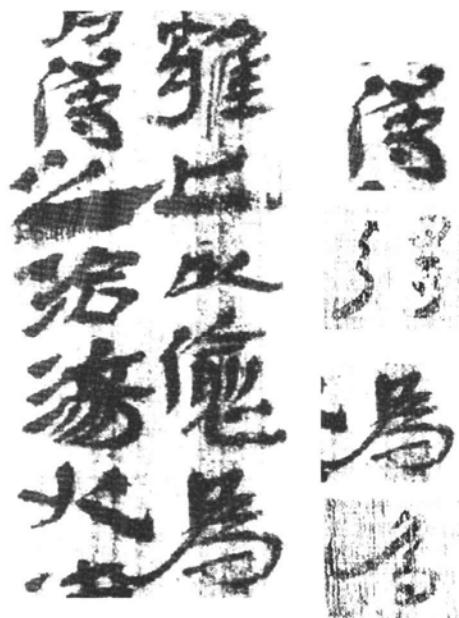
①天長前漢簡



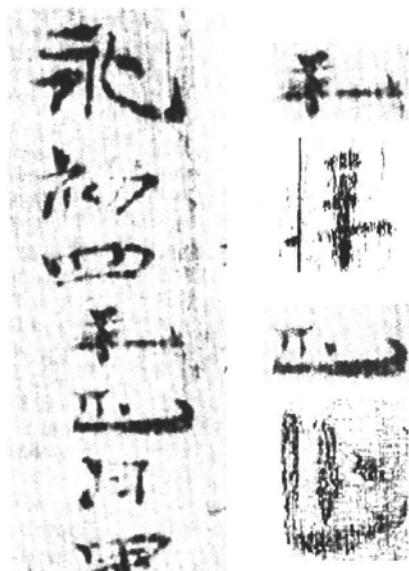
②敦煌馬圈湾漢簡



③武威旱灘坡後漢簡



④張家界古人堤後漢簡



※ 左図は各簡、右図は各簡及び東牌樓後漢簡牘の集字である。

この4つの簡牘において、東牌樓後漢簡牘と同じ湖南省から出土したものは张家界古人堤後漢簡のみである。湖南省と天長前漢簡の安徽省、武威旱灘坡後漢簡の甘肃省は距離的にみても相当に離れているが、点画や用筆に共通するものが見られる。とくに天長前漢簡は波磔のある隸書を中心を占めてはいるが、行書的な文字には横画をゆるやかに右に上げる部分や次画へ向けてのはねなど、東牌樓後漢簡牘と同じ形のものがみえる。敦煌馬圈湾漢簡は草書を交えた行草体のものがこれ以外にも複数見られる。また同じ甘肃省の武威旱灘坡後漢簡は、転折部分において、一度止め下部へ降りる書き方がみられることから、前漢の後期から後漢の早期にすでに行書のかたちが進んでいたことがわかる。また张家界古人堤後漢簡は、同じく転折部分は一度止め下部へ降りるが、横画に丸みがある点は、より今日の行書に近づいているように見える。

上記のように現在出土している東牌樓後漢簡牘以前の肉筆資料には、既に行書あるいは行意を持った隸書が存在しており、書論では後漢中期頃が行書のはじまりということになっているが、前漢中期まで遡ることが可能である。

第2章 長沙東牌樓後漢簡牘

2004年4月下旬から6月上旬にかけて、湖南省の長沙市東牌樓にある長沙地下鉄2号線五一広場駅の建設現場から後漢時代の簡牘が納められた古井戸が発見された。古井戸の2～5層からの出土で、材質の大半は杉の木、出土枚数は426枚である。そのうち文字の書かれていたものは206枚で、これらの中には、建寧(168～172年)、熹平(172～178年)、光和(178～184年)、中平(184～189年)と、いずれも後漢の靈帝期(168～189年)の年号が記されているものが複数あり、この時期に書かれたものであることがわかった。後漢の書はその代表として漢碑があるが、特に靈帝期は多様な八分隸が主流で、衡方碑(168年)、史晨碑(169年)、西狭頌(171年)、楊淮表記(173年)、韓仁銘(175年)、熹平石經(176～183年)、曹全碑(185年)、張遷碑(186年)などの名品がそろっている。しかしこの東牌樓から出土した簡牘は、これらの石刻とは異なり、日常的に使われていた肉筆資料となっている。

2006年に文物出版社から『長沙東牌樓後漢簡牘』が出版された。簡牘については王素氏、書体及び書法の分析は劉濤氏によって論じられている。次にその出土内容について述べる。

1. 東牌樓後漢簡牘の出土内容

前述に出土枚数は426枚のうち、有字簡は206枚としたが、『長沙東牌樓後漢簡牘』では、更に分析をすすめ、有字簡が208枚であると発表している。内容としては封緘、封匣、封檢、文書、私信、雑文書、雑帳、習字、残簡等に分けられる。

公文書：23件 封緘・封匣・封檢・文書

私 信：51件 封緘・封檢・私信

雑文書：67件 戸籍・名簿・名刺・券書・簽牌・雑帳・その他

習 字：19件

残簡：48件

封緘…手紙や文書などの封をとじるための木片

封匣…手紙や文書などを入れてとじる箱

封検…検査して封印するための木片

書体は篆書、隸書、草書、また早期の行書と楷書をも含む大変豊富なものである。筆者の分析では封緘は1つで隸書である。封匣は隸書と早期の楷書、封検・文書・私信・雑文書・雑帳は篆書を除く全ての書体があるが、特に草書と行書が多く、行書は主として私信に集中している。また篆書については習字簡に1つあるのみである。なお、劉濤氏が『長沙東牌樓東漢簡牘』の中で早期の行書を認め、その特徴を述べたことは新しい見解として注目される。次にその見解について述べ、全体の書体の分析を試みた。

2. 東牌樓後漢簡牘の行書

『長沙東牌樓東漢簡牘』の中で劉濤氏が述べた早期の行書の特徴⁹を要約して記すと、以下のようにになる。

①行書の形態は楷書に比べ、活発で生き生きとしており、結構の上でも草書を書くときのように草法の制約を受けず、形態が簡潔で簡便に書ける書体である

②丁寧に書かれた行書は楷書に近く、真行あるいは行楷と呼ばれ、草法を帯びた行書、放縱な書き方のものは行草と呼ばれる。

③字体の結構と筆画の特徴から言えば、たとえ成熟した行書であっても、厳格な規則を持たない書体である。単に書寫的な角度から言えば、草書を書くのに比べ行書は更に自由である。

早期の行書は早期の楷書と同じく、また草率な通俗的な隸書の親戚もある。

④当時の行書は、すでに草書の書法を吸收しており、東牌樓漢簡の行書の書跡を見れば、早期の行書のおおよその特徴は、省略された繰り返し書きが多く、結構は散漫で、字形は縦長である。

⁹ 『長沙東牌樓東漢簡牘』劉濤著 文物出版社 2006年出版 P83-84

⑤ 30号簡の背面の書跡が典型的であり、筆画が細くて力強く、横画は順筆で下筆し、前は鋭く、後ろは押さえた状態を示し、左が低く右が高くなっている。縦画は大体右に傾き、収筆は穂先が出て、止筆が少ない。払いは力があり鋭く、大体一律に上部が鈍く、下部が鋭い。その書写的な雰囲気と形態は、樓蘭遺址から出土した魏晋の行書「正月廿四日」残紙と大変似ている。

また早期の行書として、整理番号29号正面、30号正面、34号正面、41号背面、49号正面、50号正面、54号正面の7簡をあげている。更に3年後の2009年に、同じく劉濤氏の『長沙東牌樓東漢簡牘書法藝術』が文物出版社から刊行された。新たに30号背面、34号背面、47号正背面、49号背面、55号正背面、62号正背面、69号正背面、70号正背面、135号正面の14簡を行書として追加している。

そこで筆者は、まずここにあげられている各簡牘に書かれた文字について、劉氏が上げた上記5つの特徴をもとに書体の分析を試みた。なお、鮮明でない文字及び書体が特定できないものは不明、繰り返し符号は省略とした。また行書は白  で囲んでいる（大半が行書の簡は除く）。

○29号正面 (23文字)・私信

行書：9文字 隸書：7文字

楷書：2文字 不明：4文字

光和三年（一八〇年）後猶書信一 二九
(正面)
1 猶再拜。還遺賜書，告□知，意詳
2 者治。庚申歲二，簿三雁口案獄，記竟文書



29号

○30号正面（28文字）・私信

行書：16文字 草書：3文字 不明：9文字

○30号背面 (66文字)・私信

行書：45文字 楷書：1文字 不明：20文字

分問知不？忽亡世往速探問，云言漢臺之悲痛悲痛八，以無宜自羨丘山當相為
□屬財復告忌忿々九因附表命。不具。惶恐
惶恐，頓首頓首。千萬諸因之也。

※自粧省略

112



30号

○34号正面 (41文字) · 私信

行書：24文字 隸書：2文字 楷書：2文字

草書：3文字 不明：10文字

○34号背面 (35文字) · 私信

行書：23文字 楷書：1文字 草書：2文字

不明：8文字

堂致陳主簿書信 三四
(正面)

1 堂再拜白 餉食難得，人累□□□為命今日，且日夕忙久，唯
不多云矣。見乃□□。堂再拜。二。
2 陳主簿侍前：々日恣々「三」，言不悉，不以身為憂念，□
(背面)

3 1 得宿留，又言前令□張□□□□具□□呼問令
張錢所在義理一日令君給(?)乃人□□相荅教言□
伍非知□□人來也。□得大息□□曹家白□在內

34号

※白枒省略



○41号背面 (2文字)・私信

行書:8文字 不明:1文字

□□□因旋敬。張頌叩頭再拜。
張頌書信
四一
(背面)



41号

背

○47号正面 (44文字)・私信

行書：36文字 楷書：2文字

隸書：1文字 草書：1文字

不明：4文字

○47号背面 (39文字)・私信

行書：23文字 不明：16文字

唐書信 四七 (正面)

唐頓首白：久別不相見，勞內邑用小□□，□送米
穀，督空無所奉致，自慙貪欲。相見道言，廣迎欲相

□□會人師□□飯纏難為，財不非責微□□怒力□□

□□會人師□□飯纏難為，財不非責微□□怒力□□

(背面)

1 □吾往年遇旱了……別居□□□□□□

2 言□□□□□……屬吾往迷□□[四]

3 □相見者品□□屬之累□□臨湘遺夫胡□今當度

4 湘，頃汝並復作□屬汝□□□□汝小時載(?)護汝大恩□□



※白枠省略

背

正

○49号正面 (25文字) · 私信

行書：21文字 楷書：3文字 隸書：1文字

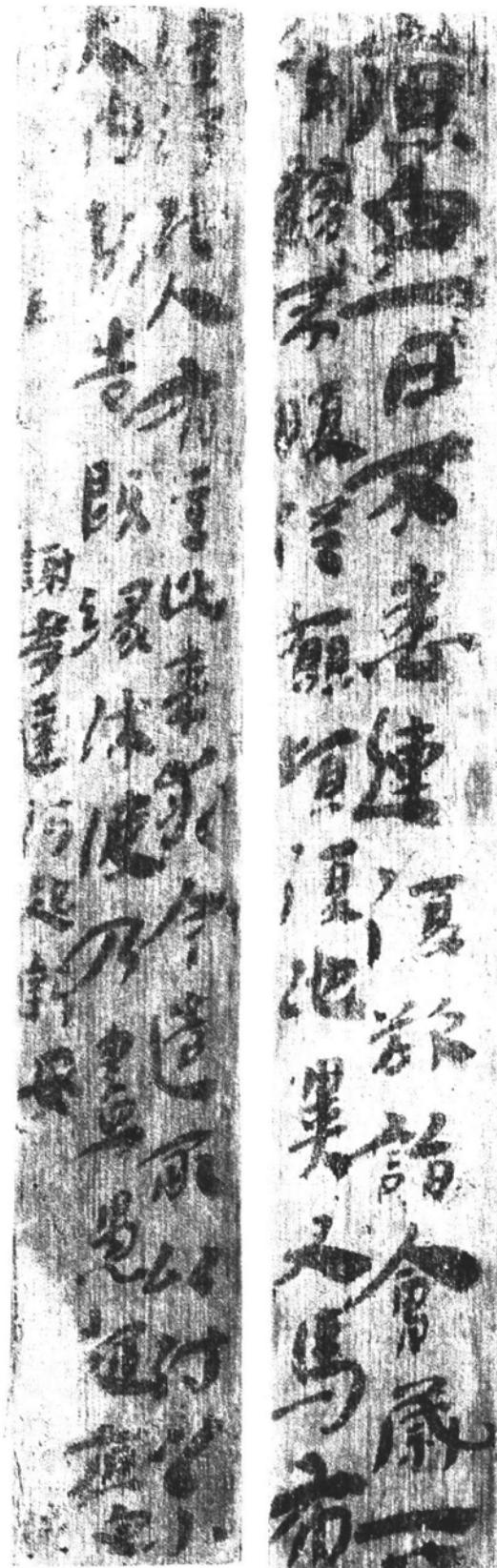
○49号背面 (35文字) · 私信

行書：30文字 楷書：2文字 草書：3文字

- 原書信 四九 (正面)
- 1 原白：一日不悉，連復欲詣，會歲下
2 □務，不腹^二從願。頃復他異，又馬布
3 2 1 障汎^一民人，有至此來求，今遣取以付之，小
大內勅告，既緣休使，乃盡愚趣。原惶
□□□。
謝^二孝達、何^三起、新^四安^五

49号

※白桦省略



背

面

○50号正面 (29文字)・私信

行書：23文字 楷書：6文字

津書信 五〇
(正面)
1 津頓首：昨示悉，別念想。區々想內少異，
2 不審久人果解未_二？迨々。獨迫君旦詣府門，
寧



50号

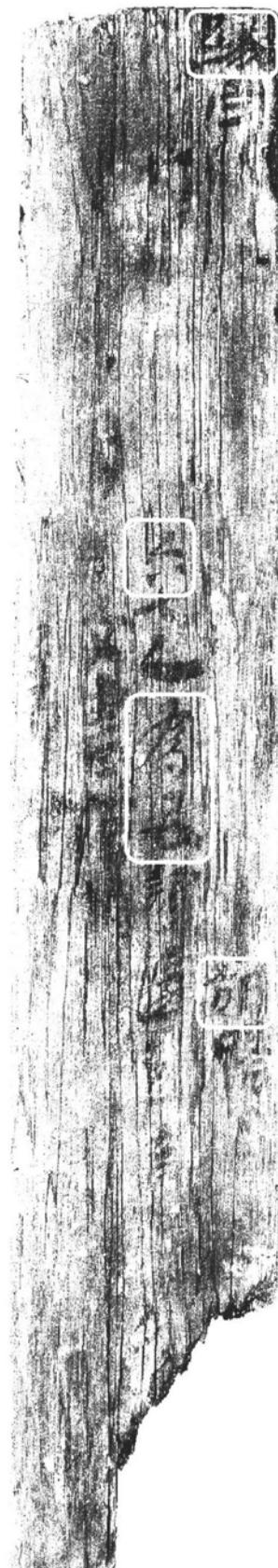
※白枠省略

○54号正面 (11文字)・私信

行書：5文字 不明： 6文字

緣殘書信 五四
(正面)

1 緣白……胡□
2 ……六七人為民，謝遷□□□□□□
3 ……文書何□〔一〕……
4 舍令……



54号

○55号正面 (42文字) · 私信

行書：38文字 草書：1文字

隸書：1文字 不明： 2文字

○55号背面 (57文字) · 私信

行書：51文字 草書：5文字

楷書：1文字

佚名書信上

五五 (正面)

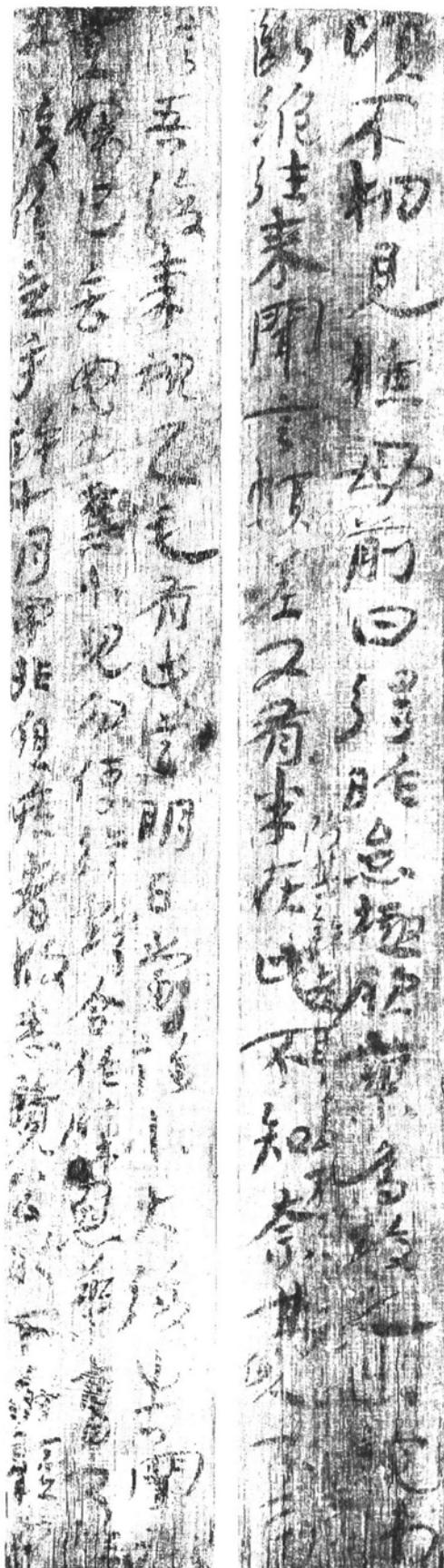
1 頃不相見。樵母前日得，昨怠極服藥。為政_二之出，□

防其餘者耳。書不……

2 斷絕往來，聞言頗差。又有米在此，不知奈其人不□

(背面)

1 信，吾復來視之，毛有此言，明日當□，小大復告。聞□
□婦已去，怒力_三□小兒，勿使行虧。合作□恩，藥曹_四又□，
3 吾復作足手_五。許十月中，非但疾者，故悉覽公以下府縣中，



55号

※白桦省略

背

正

○62号正面 (11文字)・私信

行書: 11文字

○62号背面 (15文字)・私信

行書: 11文字 草書: 3文字

不明: 1文字

佚名書信六

六二 (正面)

1 適下意事々(?) 教留内不出□閣主□

2
⋮

(背面)

3 2 1
⋮
□□書事受人見不事……〔二〕

日以至也。當有告語不? 又□伍□



62号

※白枠省略

廿一

○69号正面 (12文字)・私信

行書：12文字

○69号背面 (7文字)・私信

行書：7文字

佚名書信一三 六九 (正面)

1 □□汝當還我錢
2 □□家須得月直二耳。吾
(背面)

3 2 1 □……□□念遣往□□
□……□□收。今墓[二]之，
□……見。念々□□



正

背

69号

※白桦省略

○70号正面 (36文字) · 私信

行書：33文字 楷書：1文字

隸書：2文字

○70号背面 (34文字) · 私信

行書：28文字 楷書：2文字

草書：4文字

佚名書信一四 七〇 (正面)

1 子約，頃不語言，煩內代為改異。又前通檄，

2 白劉寔忍有北里中宅，意云曹白部，中部賊捕掾_[二]考

(背面)

事屬右辭曹_[三]，傳曹史問，令召賊捕掾急，竟其□□見在立可，竟為數催，勿忘大小改易，數告景□□

70号

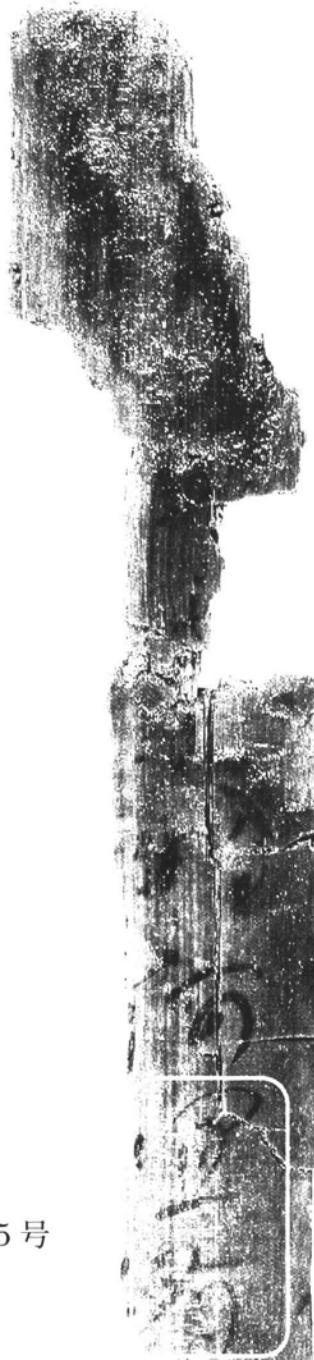
※白枴省略



○135号正面（3文字）・雜帳

行書：2文字 草書：1文字

物何宜有殘文書
物何宜有
一三五



135号

以上、ここから分かることは、劉濤氏の分類では簡全体の約7割以上行書で書かれていれば「行書」としていることである。また135号の雜帳を除き全ての内容が私信（書簡）になっていることも明らかとなった。それでは、この7割を基準とした『長沙東牌樓東漢簡牘』の行書はこれで全てかどうか、筆者は更に全ての簡牘について分析し、書体別に分類を試みた。以下がその結果である。

○行書

封 匣：3号正背面

封 檢：7～8号

文 書：13号正背面・18号正背面

私 信：29号正背面・30号正背面・32号正背面・34～36号正背面・39～42号正背面・47号正背面・
49～50号正背面・54～55号正背面・56号正面・62号正背面・65号正背面・68～69号正背面・
70号正背面

雜文書：77号正背面・78～79号正面・102号正面・104号背面・105号正面

雜 帳：111～112号・114号・127号)・133号・135号

○隸書

封 細：1号

封 匣：2号

封 檢：5号正面

文 書：9号正背面・19号

雜文書：84号・93号・94号正背面・95号・102号背面・103号・105号背面

雜 帳：110号・117～118号正背面・125号

習 字：154号正面

○楷書

封 檢：6号

文 書：12号・21号正面

私 信：24～26号・38号正背面・63号正背面

雜文書：80～82号・88号正背面・100号正背面・104号正面・108号正背面

雜 帳：113号・130～131号

習 字：142号正背面・146号

○草書

文 書：15～16号正背面・23号正背面

私 信：28号正背面・31号正背面・33号正背面・37号正背面・43～44号正背面・48号正背面

51～52号正背面・64号正背面・66～67号正背面・71号正背面

雜文書：76号正背面・78号背面

雜 帳：120号・129号

○篆書

習 字：154号背面

○不明

文 書：21号背面・22号正背面

雜文書：83号

この分類により、劉氏の『長沙東牌樓東漢簡牘書法藝術』において分類されている行書については、全て筆者と共通しているといえる。但し、劉氏による楷書と分類されている35号、36号、39号、42号簡については、筆者の分析では行書が圧倒的に多く、楷書が3分の1にすぎないことから、この4簡牘については行書と認めるのが妥当であろう。また劉氏のあげていない56、65、68、各号の正背面にも多くの行書が認められる(次頁)。なお次頁において、文字は楷書のみ抜き出した。行楷及びそれに接近する文字は、全て楷書として抜き出している。

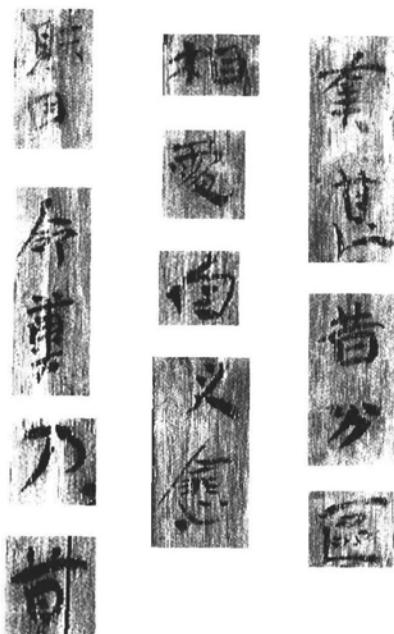
○35号正面 (39文字) · 私信

行書24文字 楷書15文字



○35号背面 (55文字) · 私信

行書40文字 楷書16文字



35号背面

35号正面

○39号正面 (7文字) · 私信

行書3文字 楷書4文字



○39号背面 (9文字) · 私信

行書5文字 楷書3文字

不明1文字



佚名致某先進書信

三九 (正面)

- 1 □一二□□□□□□□□□□□□□□勤□……
2 □□先進□侍前：勤勞暑熱

(背面)

- 1 □念區々昔往時為客，不
2 □□五以□六□七□給卒上□八徒無用相



39号正面



39号背面

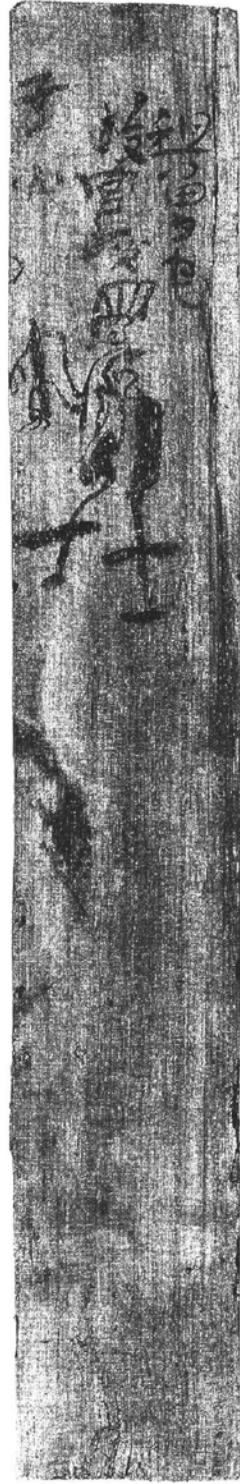
佚名書信下

五六 予公_二中未得出也。十月廿二日□□_二。背面為《校官稅等習字》。

行書6文字 楷書4文字



正面



56号背面



42号

涂輔書信 四一 1 乃公夕_二。涂（？）輔白：在外日久，恐

○42号（10文字）・私信

行書6文字 楷書4文字



佚名書信一二 六八 (正面)

(背面)

- 1 酒可道乎？ 迫此身，微不能。 是分了，愁々以仁。
- 2 賊曹二當推取不？ 勉又言，明日當令言上□

賊曹子任煩內，他復設是，當何□耳？

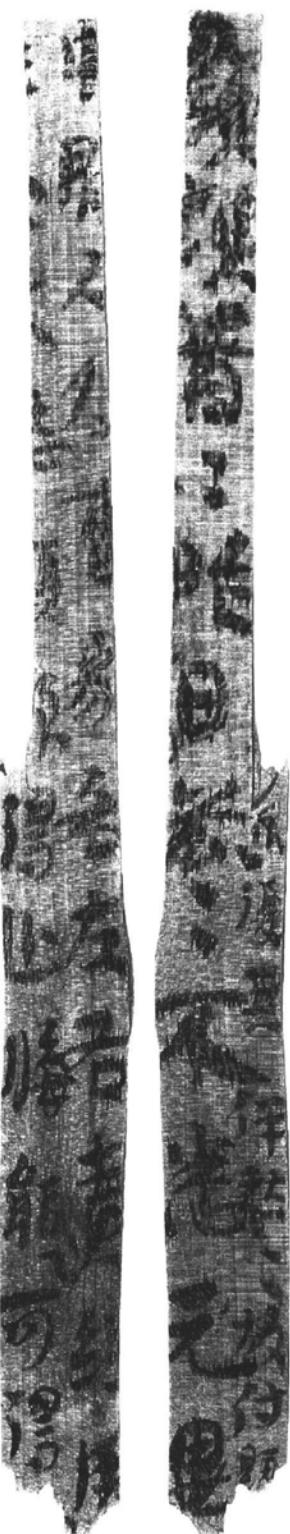


正面



68号背面

以下 8 文字以外は行書



65号背面

正面

○65号正面：「日」、「不」以外は行書
背面：「可」は草書、それ以外は行書

佚名書信九

六五 (正面)

(背面)

1

不復無伴愁々故付二

1

聞人二曹家各左右責經用二

2

叩頭頓首々々。昨日忿々，不悉元異二

2

□□□□□三得止悔，能可四得二

以上の結果から、全部で7簡牘にも行書が認められたが、これらはいずれもみな私信である。全体をとおして見ても私信については行書と草書が圧倒的に多く、また早期の楷書と思われるものも数点あるが、この時代の公用書体である隸書については一箇もない。

前述したが、東牌樓後漢簡牘は古井戸から発見されたものである。古井戸とは、土中から発掘された古代の古井戸のことであり、漢代においてはゴミ捨て場のことをさす。つまり、捨てられたことで影響の出ない文書や私信に書かれる文字は隸書である必要はなく、これらのことを考えあわせると、当時の通用書体の中心がこの行書・草書の2書体であるのは明らかである。

3. 東牌樓後漢簡牘の行書の分析

漢代は隸書だけでなく、当時流行した全ての書体に波勢の動きがある時代で、点画がうねるような形となっている。しかし前漢の中期から後期にかけて出土した簡牘には、転折部分に大きく右回転するかたちとなっているものの、隸書の左右に長くのびる均衡感覚から解き放たれ、文字の幅に変化をつけて、全体に動きが感じられる早期の行書の姿が現れ出している。更に後漢後期のものである『長沙東牌樓東漢簡牘』の点画になると、前漢中期から後漢中期の行書あるいは行意を持った隸書に比べると更に変化し、今日の行書の形に近いものも複数あることがわかる。書体の変遷を大まかにみると篆書から隸書となり、そこから草書・行書・楷書に分かれるのであるが、その変遷は単純なものではなく、互いに影響し合いながら完成されていく。東牌樓後漢簡牘の行書も例外ではない。但し、封緘・封匣・封檢・公文書のように表に見えるもの、あるいは公的なものに関しては相変わらず隸書が使われている。次に東牌樓後漢簡牘の行書と隸書を比較し、行書の特徴を解くとともに行書と隸書の明確な書き分けを確認する。

(1)点画・用筆

①横画

横画の始筆は、隸書が藏鋒であるのに対し露鋒で書かれている。送筆は水平なものが多いが、わずかに右上がりのものもあり、中央を膨らませた形となっている。終筆ははらうように抜いていくものが大半であるが、止まるものやはねるものもある。また波磔のあるものもわずかに残る。

隸 書	行 書	特 徴
		起筆は筆の穂先を出して中鋒で書かれ、収筆は止めずに抜いていく。中央を膨らませた太い線になっている。
		横画が重なる場合は、1本を長く、残りは短くなり、点のようになる。
		起筆は露鋒で書かれ、収筆をしっかりと止める楷書風のものもある。
		次画に続ける場合は収筆がはねられることがある。(與)
		波磔のある場合は、始筆も藏鋒になる。 3文字が確認される。 34号正面「再」・49号正面「下」・70号背面「立」

①縦画

縦画は大半が直線的で、横画との重なりの有無や前後の画とのつながりによって収筆が変化するものもある。起筆は露鋒で、その書かれる方向は垂直、左右と幅広い。収筆は隸書の止めとは異なり、はらいが多いが次画へ向かっているものも複数見られる。

隸書	行書	特徴
		真下にはらわれる。横画に比べ長くなる。
		起筆は露鋒で止め、左右に傾けながらはらわれる。また左右に縦画が並ぶ場合、下部をひきしめたり向勢をみせる形が多い。
		次画に続く場合は、収筆がはねになる場合もある。

③転折

転折は横画が水平またはそれに近いものが多く、転折部から下に向かう縦画に変化が多い。また左転折はふくらみのあるものと反ったものの2つに分かれる。

隸書	行書	特徴
		横画は水平で進み、転折は緩やかなカーブでわずかに左に傾いている。
		横画は水平で進み、転折では急激に巻き込むように90度以内で回転し、そのまま文字の下部を引き締めるようにおろす。
		横画は水平で進み、転折は橍円を描きながら下部を引き締めるように曲げる。
		横画はすぐ右下がりに向かい、転折部で急激に回転し、そのまま下部を引き締めるようにおろす。
※左転折 		縦画、横画共に直線的である。

④左はらい

左はらいは、傾きの少ないものが多く、収筆に複数の変化が見られる。

隸書	行書	特徴
		直線的で傾きが立っている。収筆に鋭さがない。
		長く曲がったはらいは、傾きがあり、収筆も鋭い。
		左下に向かって大きく曲がり、内側へ巻き込むようにね上げる。

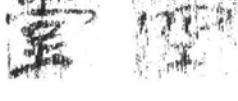
⑤右はらい

右払いは隸書の主となっていた波磔は無くなっている。左はらいに比べ、かなり太い。

隸書	行書	特徴
		ゆるやかなはらいは、波磔のすくいあげるような鋭さはなくなっている。
	(取) (復)	反りを控えめにした直線的で太いはらいである。太さに変化はなく短い。
		前画をうけて、内側へむいている。収筆ははらいを控えめに軽く止めるような終わり方である。

⑥はね

はねは、左はね・右はね・横画からのはねの3つに分けられる。

隸書	行書	特徴
		左はねは大きく外に向けて反り、次画へむけてすすんでいる。
		右はねは内側に空間を保ち、上部に向かっている。
		上部横画は長めになり、最後につくはねは、「つ」の形になっている。

⑦点

点は、隸書が左右に離れていたのに対し、次画へ短い距離で続く形をとる。

隸書	行書	特徴
		左の点は右に向かい、右の点は左に向かいっている。
		上部にある二点は、「ソ」の形になる。
		脚のしたごごろの二点は「い」または「い」を続ける。

東牌樓後漢簡牘の行書の点画をみていくと、今日の行書と同じように横画は少し右上がりで、用筆においても続けたり、離したりといった続け方としては、大きな違いはない。ただし、起筆はほとんどが露鋒になっており、ここが特徴的な部分である。早期の行書は隸書の早書きであるが、隸書の起筆の基本である藏鋒は失われ、自由に書かれているところがある。それは東牌樓後漢簡牘の草書に近く、横画の起筆は同じかたちであり、また送筆の中央を膨らませた形になっているところもひじょうによく似ている。転折や右はらい、左はらいについても草書と共通しており、これは劉

氏の言う「当時の行書は、すでに草書の書法を吸収して」いるのが正しいことがわかる。では、劉氏がそのあとに続けている「東牌樓漢簡の行書の書跡を見れば、早期の行書のおおよその特徴は、省略された繰り返しが多く、結構は散漫で、字形は縦長である。」のか、次に結構および簡化について分析する。

(2)結構

後漢後期は既に草書が便利な書体として大流行し、実用書体としても大いに使われていた。また紙の普及とも関連して運筆も大きく変わっていったようである。東牌樓後漢簡牘の行書は、波勢を持って左右への力の均衡をはかる隸書とは異なり、字の左右を狭め、下方へのばす造形感覚をもつている。また字形全体も縦長になっている。以下にその外形と左右・上下の組み合わせについてその特徴をまとめた。

①文字の外形

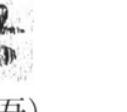
隸　書	行　書	特　徴
		正方形または長方形のものが横画や払いの長さを短くすることにより三角形または台形になる。
		波磔が長めの点に変化したため、扁平が縦長になった。
		横画を短くしたため、縦画が長くなった。

②左右の組み合わせ

隸書の影響が多少残っているせいか、へんと旁の高さの揃っているものもわずかにあるが、文字の連続性を意識した、高さの変わるもののがその大半である。旁が上に来ているものは 30 号正面の「猶」背面の「往」の 2 文字、49 号正面の「腹」、背面の「縁・休・使」の 4 文字、55 号正面の「樵・得・絶」、背面の「欲・復」 5 文字の計 11 文字に見られるのみである。大半は、へんが上がり、旁が下がるもの、あるいは上部をそろえ下部は旁が下がるものとなっている。

隸 書	行 書	特 徴
	 (語)  (極)  (數)	へんが上がり、旁が下がる。
	 (財)  (漢)  (詣)	へんと旁の上部をそろえ下部は旁が下がる。
	 (辭)  (財)  (相)	へんに比べ、旁が大きいものや小さいもの、旁が上に上がるものもわずかにある。

③上下の組み合わせ

隸 書	行 書	特 徴
 (李)	 (李)  (早)  (吾)	木+子 日+干 五+口 2 文字が縦に並んで1 文字を作っている場合、縦長で横画の線の長さに変化がないことが多い。
 (恐)	 (忘)  (悉)  (窓)	下部に「心」が付く場合は下を横長に大きく書くことが多い。

(3)簡略化

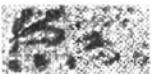
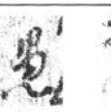
点画の簡略化には、連続・省略・筆順の変化の分類を試みた。

①点画の連続

隸書	行書	特徴
(有)	(有) (命) (又)	横→横に続ける。
(力)	(力) (半) (主)	縦→縦に続ける。
(付)	(付) (頃) (須)	へんの縦→旁の横に続ける。
(行)	(行) (召) (外)	左はらいの連続。
(復)	(復) (異) (大)	左はらい→右はらいに続ける。 右はらいを少し伸ばした点にし、続けやすくなっている。
(爲)	(爲) (約) (去)	折れから点に続ける。
(無)	(無) (馬) (爲)	4つの点の連続。

②点画とその省略

点画の省略をすることで、残った画の方向や長さ、筆順が変化する場合もある。

部 首	隸 書	行 書
いとへん いとへん	 (縁)	 (縁)  (絶)
きへん きへん	 (相)	 (相)  (相)  (檄)
ぎょうにんべん ぎょうにんべん	 (復)	 (復)  (得)  (微)
したごころ したごころ	 (恐)	 (息)  (愚)  (意)
にんべん にんべん	 (何)	 (何)  (休)  (作)
くち くち	 (言)	 (言)  (吾)  (告)
しんによう しんによう	 (還)	 (還)  (連)  (送)
ひと ひと	 (今)	 (今)  (命)  (人)

③筆順の変化

隸 書	行 書	行書の筆順
 (中)		L Lフ 中

		フヨ申畫 トニミ画
		フヨ申畫 トニミ画

東牌樓後漢簡牘の行書の書法について、劉氏は、4つの方式があるとしている。

その1 「筆画の省略」

例えば「にんべん」は、二画を一画として、斜めの豎画に書くか、あるいは湾曲した一筆で書かれる。「したごころ」は、連続した三点で書かれ、あるいは一本の横画に変わる。「為」は、下部の四つの点は省略されて「一」（横画）になる。

その2 「筆画の短縮」

例えば「言」の字の中間の二本の横画、「命」の字の終画の縦画は点のように書かれる。「人」、「今」、「愛」の字の右払いは、長い点のように書かれ、「ぎょうにんべん」は、上から下に三点を打ったように書かれる。

その3 「転筆（転折）の多用」

例えば「曰」、「ほこづくり」の転折部はまるく回転しながら下に向っていく。

その4 「組み合わせのあいまい」

例えば「口」、「月」、「具」など包まれた結構の“吻部”である左上の角の豎画と横画の接筆のところは常に接しておらず、口のあいた状態となっている。

劉氏の分析その1の「二画を一画として」は、49号簡正面の「復」、「頃」、背面の「休」、「使」、および30号背面「往」に見られるが、それ以外の縦に並ぶ文字は皆平行になっており、該当しないものの方が多い。しかし、全てに共通しているのは、へんが草書的に書かれ、旁との間に空間をとりながら、旁へと続くようになっている点である。これは東牌樓後漢簡牘以前の行書には見られな

いかたちである。また「したごころ」の付く文字は東牌樓後漢簡牘中に19文字あるが、そのうち鮮明に形が見られるものは13文字ある。「心」の点が2つのものが70号正面の「意」、同じく背面の「忘」・「急」の3文字あり、劉氏のいう相連なる三点、つまり最後の点が一つの短い点になってはねられているものが30号背面の「恐」・「^{そう}忿」・「忽」、49号背面の「愚」・「忽」、55号正面の「怠」、同じく背面の「怒」、62号の「意」に見られる。また点が一本線になっているものは70号正面「忍」、「心」全体が草書のように一本のものは40号背面の「忽」のみとなっている。この結果を見てみると、70号正面を除く残りの簡牘は、同じ簡牘に同じ書き方になっていることがわかる。これは書き手の癖も入っているであろうが、主流となっている書き方といえるだろう。また4つの点の省略であるが、劉氏の指摘通り草書で書かれているもの以外は「為」・「無」・「馬」全てにおいて「一」になっている。このように見ていくと当時、点は一本の線、あるいは点を少し伸ばしたもののがその大半をしめていることがわかった。

その2の右はらいについては、長い点のような形になっているものが多いが、49号背面の「今」同じく正面の「人」、30号背面の「會」、70号背面の「史」などは楷書のような太い右はらいになっている。こちらも書き手の癖もあるだろうが、各々の簡牘全体を見た場合、右はらいのある文字の前後が細め、あるいは小さめの文字を配しているもの、またははらいのない文字に挟まれているものが見られ、右はらいが簡牘全体の引き締めやアクセントの役割を果たしているように見える。

その3の転折について、「まるく回転しながら下に持っていく」のは、筆者の分析からみると点画の③転折の項目で述べているように、横画から縦画に降りて行く際の縦画は全て丸みを持って大きくカーブしているということである。

その4の組み合わせのあいまいは、逆三角形のような形の「口」は画が付いていないことが多い。34号正面の「旦」・「日」、47号正面の「白」同じく背面の「胡」、「時」など、劉氏のいう接筆部分は接しておらず、あいた状態になっているのは間違いない。

以上、筆者の分析に加え、劉氏の行書の書法について実例をあげながら見ていったが、東牌樓後漢簡牘の点画・用筆、結構、簡化は、早期の行書とはいえ、相當に進んでいることが示されている。当時の草書はかなり洗練されるとみられるが、行書はその様式を取り入れながら、隸書とは異なる字形をめざす形成期に入ったといえるであろう。

(4)章法

文字を書く場合、各字を配置する間隔、文字の大小、行間、また全体に一貫した脈略が重要となる。東牌樓後漢簡牘の行書はそれ以前のものと異なり、内容に私信が多い。前漢中期の天長前漢簡や後漢中期の張家界古人堤後漢簡にも一部私信が含まれているが、その大半は公文書や律令等になる。私信は既に出土していた樓蘭残紙にも見られるように、一定の章法が存在する。行書で書かれた東牌樓後漢簡牘にもその様式は見られる。東牌樓後漢簡牘の私信の章法の特徴としてまずあげられるのは、1行目の大きな書き出しとその後の小さな文字との組みあわせである。これは東牌樓後漢簡牘以前には見られない用法である。限られたスペースに大小の文字がぶつからないように配置に工夫がされ、また各行は次画に続く流れの良い字となっている。この大小の文字の組み合わせは、後の西晋から東晋にあたる樓蘭残紙や王羲之の姨母帖に至るまで同じであるが、簡牘から紙に移った場合は、紙面の幅に合わせて行間がとられる章法に変化している。(下図)



49号



34号



樓蘭殘紙濟遲白報



王羲之 姨母帖

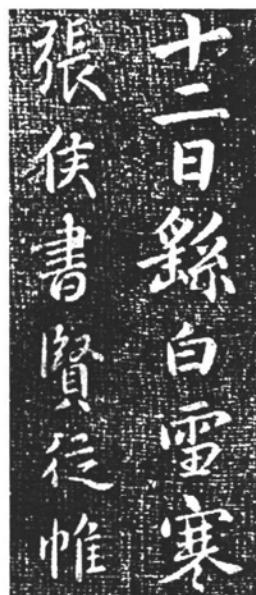
なお東牌樓後漢簡牘の私信の書き出しの言葉であるが、行書に限定してあげるなら、以下の一覧になる。草書や早期の楷書と思われる私信にも書き出しの言葉を使っているものが数点あり、いずれも我々が日常使う「拝啓」や「前略」にあたる言葉である。

29号	30号	34号	40号	47号	49号	50号	55号	65号	70号
猶再拝	下書猶頓首	堂再拝	諾白	唐頓首	原白	津頓首昨	頃不相見	叩頭頓首	子約

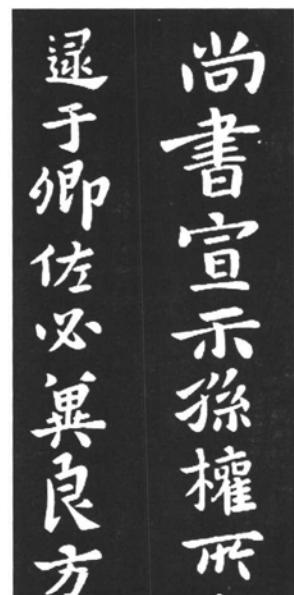
また当時の法帖の行書作品の中にも同じ章法をつかったものがあるので、次にあげておく。後漢後期の行書で、法帖の残る数少ない一人として鍾繇をあげることができる。鍾繇の作品はほとんどが刻帖であり、書体も楷書がその大半である。また内容も上表文が多く、君主への文書のため私信ではないが、書き出しの大きいものは行書が賀捷表と雪寒帖の2つ、少し行書を交えた楷書では宣示表にも見られる。



賀捷表



雪寒帖



宣示表

このようにみていくと、肉筆資料および法帖のうえからみても、尺牘のこの章法はすでに後漢後期には存在したといいうことがいえる。

第3章 繼承される行書

東牌樓後漢簡牘と同時代の鍾繇や張芝の法帖は、これまで模刻や模写を重ねているため正確なものではないというのが定説であった。また鍾繇らの時代に行書が存在したという前述の文献の記述も単なる伝説に過ぎないと考えられていた。しかし東牌樓後漢簡牘の出土によってその信憑性が徐々に高まり、進展をみることになった。すでに第2章の章法において、鍾繇の刻帖のいくつかに東牌樓後漢簡牘の章法と似たものがあることにふれているので、これについては省略するが、東牌樓後漢簡牘と鍾繇の行書文字を比較し、また淳化閣帖に収録されている草聖張芝の行草書の中の行書、同時代の他の行書作品を見ながら、後漢後期以降の行書の姿がどのようなものであったか、またどの程度一般化されていたのかについて述べる。

1.鍾繇の行書

鍾繇（151-230）、字は元常、潁川長社（河南省）の人。後漢獻帝のとき、孝廉に挙げられ、尚書郎・陽陵令となり、のち侍中・尚書僕射に至り、東武亭侯に封ぜられた。また魏の文帝、明帝に仕え、建国の功臣として重用され、太傅に進み定陵侯に封ぜられた。書は曹喜、蔡邕、劉德昇を師とし、最も真書を善くした。¹⁰張懷瓘の『書斷』（中）¹¹に「剛柔備焉、點畫之間、多有異趣。可謂幽深無際、古雅有餘、秦漢以來、一人而已（剛柔備わり、点画の間、多く異趣有り。幽深際り無く、古雅余り有り、秦・漢以来、一人のみと謂う可し。）」とあるように、剛と柔を兼ね備え、点画が特に優れて、奥深く古雅なものを書く鍾繇は、秦・漢以来の第一人者だとしている。しかし鍾繇の作品は、刻帖によって残されているのみである。その大半は楷書で、行書といえるものは数少なく、しいていえば『墓田丙舍帖』だけで、これは書論『古來能書人名』でいうところの行狎書にあたる。

また章程書ではあるが、行楷作品の『還示帖』、『白騎遂内帖』、『雪寒帖』、『宣示表』にも行書は数個みられる。『還示帖』、『白騎遂内帖』、『雪寒帖』、『宣示表』が扁平の字形で、全体に文字の上部

¹⁰中国書論大系第1巻『書人伝』二玄社 1977年出版 P359

¹¹中国書論大系第3巻『書斷(中)』張懷瓘著 杉村邦彦訳 二玄社 1978年出版 P114

に重心が来ており、収筆が隸書に近いのに対し、『墓田丙舍帖』は縦長の字形になっている。また書き方もやや速く、横画が右上がりになっており、隸書の趣は感じられない。以下に東牌樓後漢簡牘と墓田丙舍帖の文字を比較してみた。

	欲	使	府	家	有	也	已
墓田丙							
東牌樓							

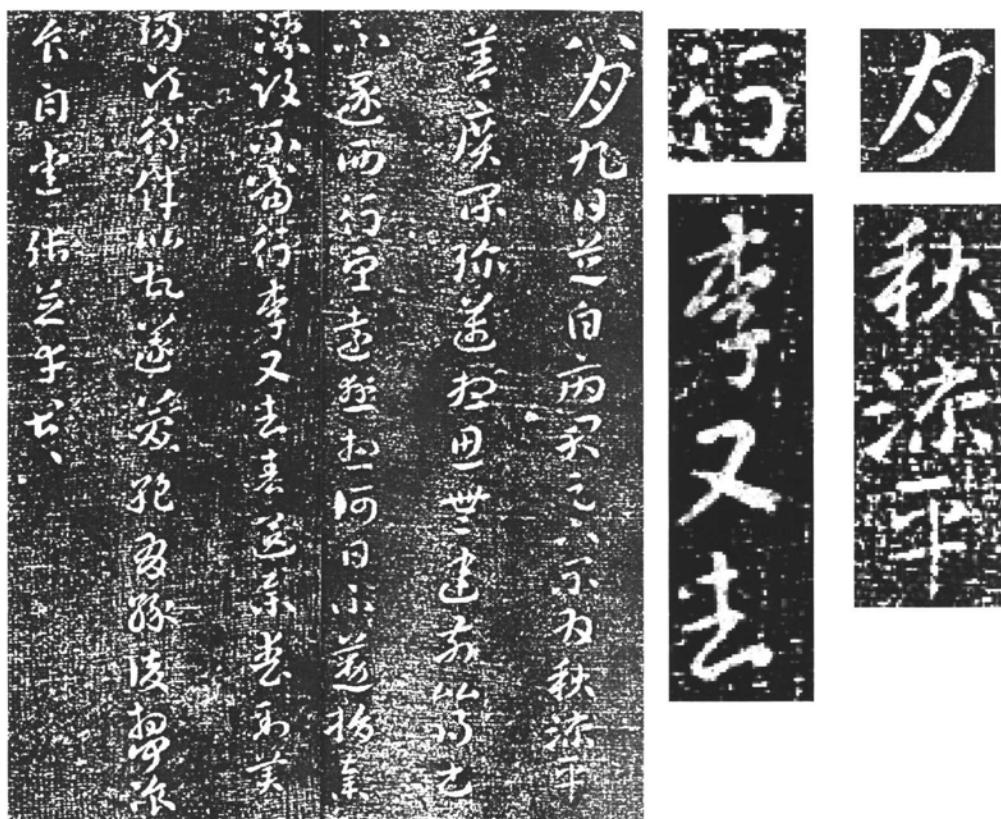
全体として東牌樓後漢簡牘の方が柔らかく、自由な感じに見えるが、「府」、「家」、「有」の縦画の収筆のはねを一度止めてはねる形にすると墓田丙舍帖と同じになる。また「也」、「已」の最終画のはねも一度止めると同じことがいえる。さらに、「欲」、「使」については東牌樓後漢簡牘、墓田丙舍帖ともに最終画の右はらいが左はらいをうけて同じ方向に向いているのが確認できる。東牌樓後漢簡牘が書かれた時代は、ちょうど鍾繇が17歳から37歳の間に相当する。隸書の最盛期であったこの時代に、若い鍾繇は、上表文として書かれた章程書にあたる『還示帖』、『白騎遂内帖』、『雪寒帖』、『宣示表』を隸意のある楷書で書く一方で、東牌樓後漢簡牘に見られる当時最新の書き方を取り入れながら行狎書の『墓田丙舍帖』を書いたのではないだろうか。後に王羲之の『自論書』¹²に「惟鍾張故為絶倫。(中略) 去此二賢僕書次之(惟だ鍾・張は故より絶倫と為す。(中略) 此の二賢を去らば、僕の書之に次ぐ」と王羲之が鍾繇を褒め称えた言葉も銘石の書、章程書、行狎書、全てに精通する鍾繇の実力を裏打ちするかたちとなっている。

¹²中国書論大系第1巻『自論書』王羲之著 杉村邦彦訳 二玄社 1977年出版 P134

2. 張芝と同時代の行書

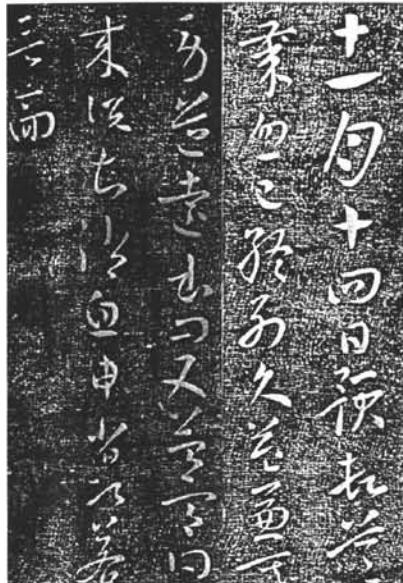
鍾繇と同年代の代表的な能書家に張芝（?-190-193）が知られている。張芝は、草書に巧みで草聖といわれるほどであったが、張懷瓘の『書斷（中）』¹³では「伯英章草草行入神。隸書入妙（伯英の章草・草・行は神に入り。隸書は妙に入る）。」と、行書においてもその才能が一等であることが示されている。ただし、鍾繇と同じく真跡が存在しない。そのため、代表的な作品である『秋涼平善帖』をはじめ『冠軍帖』、『今欲歸帖』などの作品の信憑性については長く不明のままであった。しかしこれも東牌樓後漢簡牘の出土によって次第に解き明かされようとしている。ここでは張芝と張芝に近い時代の杜預（222-284）、索靖（239-303）、衛恒（252-291）、晋武帝・司馬炎（265-290）の行書を『淳化閣帖』に収録されているものから抜き出した（草書と同形のものは一部省略）。

張芝『阿史病轉差帖』

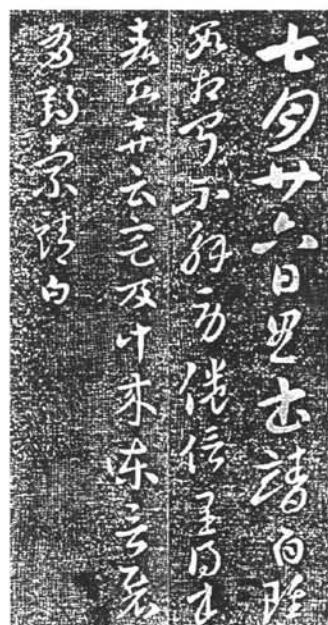


¹³中国書論大系第3卷『書斷（中）』張懷瓘著 杉村邦彦訳 二玄社 1978年出版 P111

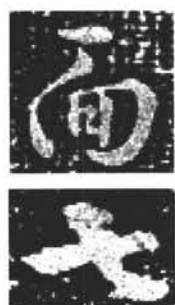
杜預『歲終帖』



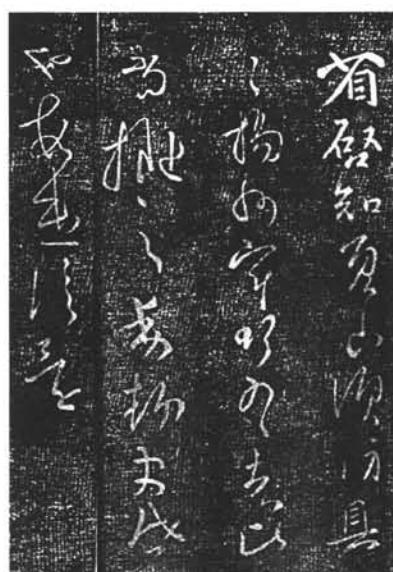
索靖『七月廿六日帖』



衛恒『一日帖』



晋武帝・司馬炎『省啓帖』



これらの作品から、書き出しはどれも大きく太く書かれ、特に日付の部分にその特徴があるということが見えてくる。これは先述した尺牘の章法をそのまま踏襲したものであろう。また作品の書かれた順からは、鍾繇が楷書からくずした行楷であるのに対し、張芝および三国以降の作品には西晋に近づくにつれて、草書に近い行草になっていることに気づく。

三国時代に入り、特に魏については公用書体も少しかたちが変化し、石刻は縦長の字形がその中心を占めるが、相変わらず隸書であることには変わりがない。その一方、尺牘についても後漢後期から王羲之の時代に至るまで、その書式が忠実に継承されていったことがわかる。

おわりに

東牌樓後漢簡牘から出土された行書簡について、同じ隸書簡と比較するかたちでその用筆、結構、簡略化、章法を分析した。また東牌樓後漢簡牘前後の簡牘、残紙、刻帖をたどり、後漢後期の行書の変遷をみてきた。その結果、行書の起源が前漢中期にまでさかのぼることが明らかになった。同時に後漢中期までの行書と異なり、後期は大きく進化した新しい行書が生まれていることも見られた。字形は無論のこと、尺牘の書式の基盤もこの時代に作られたと考えられる。しかし東牌樓後漢簡牘の行書はそれまでの行意を持った隸書から一歩進んだ早期の行書にすぎず、隸書の波勢は静まりつつも、今日の我々が持っている行書のイメージとは一線を画するものである。簡によっては、俗筆なものも相当含まれている。劉氏は、これについて次のように述べている。「書体の特徴の曖昧さの原因は多種あり、気軽に省略したり、急いで雑になったり、あるいは当時の一般の通俗的な体勢に従うものなどである。後漢の書写人の中においては、ただ筆を下ろして字を書くだけであり、使われる書体は自分の中ではっきりとしており、当時の人も見ればすぐにわかったのである。しかし我々は魏晋の名家による楷書・行書の様式に見慣れており、この二つの書体の早期の形態に対する変遷の軌跡にも詳しくないので、この種の漢代の通俗的な書体をどこに位置づけるかは大きな課題となるのである」。¹⁴また啓功氏の『古代字体論稿』、裘錫圭氏の『文字学概要』が早期の行書・楷書に対し論じ述べているとして挙げている。それは、彼らが考古出土のある種の通俗的な書跡は、整った隸書とは違うことに注意し、区別するために“新隸書”という概念を持って示し、早期の楷書・行書のある種の特徴を慎重に推論したものであり、我々は彼らの関連する分析や判断を通して啓発を受けることができるとしている。

後漢時代の行書は三国時代以降の能筆家の出る直前の避けて通れない形成期のものである。隸書とは明確に分けながらもその位置づけは単純ではない。しかし東牌樓後漢簡牘の中には後の行書を予見できる筆致も散見できる。劉氏も30号簡をあげて、樓蘭遺址から出土した魏晋の行書「正月廿

¹⁴ 『長沙東牌樓東漢簡牘』劉濤著 文物出版社 2004年出版 P78

四日」残紙と相似していると述べている。これは東晋以後の行書の方向性を示唆するものとして特筆すべきものである。また行書の中に楷書の特徴も見られ、これは鍾繇の行書との比較でも明らかであったが、やがて正式書体となる楷書の基礎をも含んでいるといえる。

本論では東牌樓後漢簡牘を軸に後漢後期に限定した行書の変遷について明らかにするにとどまつたが、後に続く三国・西晋時代の行書、楷書の変遷に東牌樓後漢簡牘がどのように関わり、その変遷の筋道を築いたのか提示することができたと確信した。第3章において述べた張芝、杜預、索靖、衛恒、晋武帝・司馬炎など三国・西晋時代には多くの書人が活躍したにもかかわらず、その真蹟はほとんど皆無である。このことから、書法の分析においては出土された肉筆資料に頼らざるを得ないのが現状である。今後も更に多くの肉筆資料が出土され、研究が続けられることであろう。東牌樓後漢簡牘以外の出土物にも三国・西晋、また王羲之に代表される東晋時代以降の書法の解明と発展していく過程を見ることも可能であるかもしれない。新たな出土資料に注視し、これから筆者の研究課題としていきたい。

参考文献

- 劉濤 (2006) 『長沙東牌樓東漢簡牘』 文物出版社
- 劉濤 (2009) 『長沙東牌樓東漢簡牘書法藝術』 文物出版社
- 中田勇次郎 (1977) 『中国書論大系第1卷』 二玄社
- 中田勇次郎 (1978) 『中国書論大系第3卷』 二玄社
- 青山杉雨他 (1988) 『スウェン・ヘディン樓蘭發現 残紙・木牘』 日本書道教育会議
- (1989) 『書体シリーズ2行書百科』 芸術新聞社
- (1990) 『中国法書選10 木簡・竹簡・帛書』 二玄社
- (1990) 『中国法書選11 魏晋唐小楷集』 二玄社
- 青山杉雨他 (1991) 『読壳書法講座3行書』 読壳新聞社
- 西林昭一 (1991) 『書の文化史』 二玄社
- 西林昭一 (1994) 『中国甘肅新出土木簡選』 每日新聞社
- 金子卓義 (1996) 『居延新出土書法木簡選』 每日新聞社
- 大庭脩 (1998) 『木簡古代からのメッセージ』 大修館書店
- 富谷至 (2003) 『木簡・竹簡の語る中国古代の文化史』 岩波書店
- 福田哲之 (2003) 『文字の発見が歴史をゆるがす』 二玄社
- 宋少華 (2010) 『湖南長沙三國吳簡』 重慶出版社
- 横田恭三 (2012) 『中国古代簡牘のすべて』 二玄社
- 西川寧 (1987) 『新装版書道講座②行書』 二玄社
- (1979) 『書道全集第2卷中国・漢』 平凡社